

益田市市長
山本 浩章

この度『市長室からこんにちは』は第100号を迎えました。

100という数字は一般的に切りの良い数字とされますが、数学的には数ある「数」の一つに過ぎません。たまたま人間の指が両手で10本だったことから、10で桁が一つ上がる十進法がほとんどの文明で採用され、10の自乗(2回掛けること)が100であるというだけのことです。

少し空想を広げてみます。もし人間の指が6本指だったとすれば、その倍の12が区切りとなり、十二進法が採用されていたかもしれません。10の約数は1と自身の数10以外には2と5しかありませんが、12は2、3、4、6と約数が多く、山分けするにはずっと便利な数です。12個を1ダースとするのはそのためでしょう。その自乗である144は1グロスといい、さらに具合の良い数字です。100の約数は全部

9個なのに対し、144の約数は15個もあります。1桁の数に限れば、100は2と4と5でしか割り切れないのに対し、144は5と7以外のすべての数で割り切れます。そのかわり、小学校の算数では九九(9×9=81)までではなく、11×11=121まで暗記しなければならなかったかもしれないと考えると、ややぞっとします。

さらに空想をふくらませて、足の指も手の指同然に器用に曲げ伸ばしでき、数えることに使うことができたとしたら、両手両足の指の総数である20で桁が一つ上がることになっていたかもしれません。この場合は、19×19=361まで覚えなければ、などと考え始めると、やはり十進法の方がありがたく思えます。

コンピューターは、2で桁が一つ上がる二進法で演算を行っています。この世界では、例えば2の10乗にあたる1024の方がよほど切りの良い数字といえます。記憶容量や通信速度などの単位において、1000ではなく、1024を1k(キロ)とし、100万ではなく、2の20乗、すなわち1,048,576を1M(メガ)とするのはこのためです。第100号は大台に乗せたばかりに数字すくめとなりました。

日本遺産のまち益田の歩き方

第6回 七尾城跡と住吉神社

【問い合わせ先】

益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
担当：市文化財課 ☎ 31-0623

七尾城跡は、中世の益田の領主益田氏の城の遺跡です。平成16(2004)年に三宅御土居跡とともに益田氏城館跡として国の史跡に指定されています。中世の城なので天守閣や石垣はありませんが、自然地形を活かした堅固な山城です。

七尾城がいつ頃築かれたかは諸説ありますが、南北朝時代の延元元(1336)年に南朝方勢力が益田氏の籠もる「益田城」の「北尾崎木戸」を攻め破ったと記す古文書があります。この「益田城」が七尾城であり、その初見と考えられています。この頃の七尾城は、丘陵北側の尾根を中心とした小規模な城であり、その後、段階的に整備され、中世末期までに丘陵全体が要塞化されたと考えられています。1600年の関ヶ原の合戦後に益田氏が益田を去ると、七尾城も城としての役割を終えました。

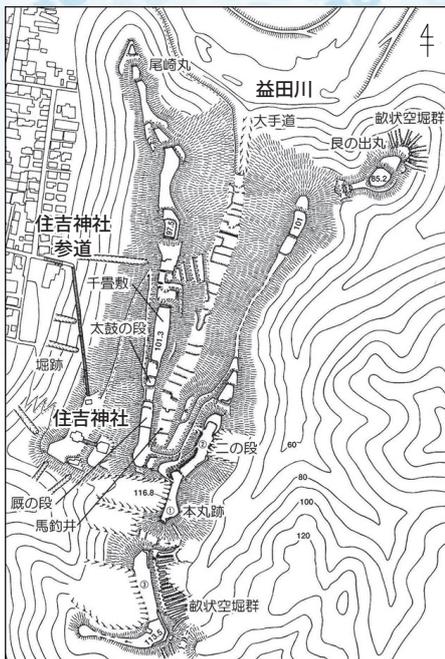
七尾城跡の大手(正面)は、本来、益田川に面する北側であったと考え

られています。現在は通行困難のため住吉神社の参道から登ります。中腹に住吉神社があります。住吉神社は、天正4(1576)年に益田元祥が妙義寺境内に勧請したもので、万治元(1658)年に七尾山に移されたといわれています。

さらに登って厩の段あたりから山城らしさが増します。二の段の北端には庭園が、本丸の北端には瓦葺きの門があつたこと、また本丸と二の段には礎石建ちの建物が並んでいたことが発掘調査で確認されています。このことは、七尾城が防衛のための拠点であるだけでなく、居住空間としても活用されていたことを示しています。本丸からは中世の城下一望することができます。

【場】七尾町

石見交通バス都茂線ほか益田高校前経由の各路線のバス。水源地前バス停徒歩5分。



七尾城跡縄張り図